

金メダル3つの岡選手、大けがからの復帰支えた執刀医 - 林英俊・医療法人アレックス理事長

◆Vol.1

「AR-Ex Medical Group」代表、ACL断裂オペ経験5000例以上

スペシャル企画 2024年8月20日 (火)配信 聞き手・まとめ：橋本佳子（m3.com編集長）

パリオリンピックで日本選手団は20個の金メダルを含む45個のメダルを獲得、中でも活躍が光ったのが、金メダル3つ、銅メダル1つの成果を残した体操の岡慎之助選手（20歳）だ。2年前に右膝前十字靭帯断裂と半月板損傷という逆境からの復活だった。

その手術を担当したのが、医療法人アレックス理事長で、膝前十字靭帯（ACL）の関節鏡視下手術の第一人者である林英俊氏。同法人は、手術室3室の有床診療所を持つ「AR-Ex 尾山台整形外科」をはじめ、都内と埼玉県、長野県で計8カ所の診療所を運営、スポーツ整形外科に特化した「AR-Ex Medical Group」と称している。年間約700例の手術件数を誇る。

読売ジャイアンツのチームドクターなども務めた経験のある林氏に、岡選手のエピソードや「AR-Ex Medical Group」の現在・過去・未来、スポーツ整形外科にかける思いをお聞きした（2024年8月16日に取材。全3回の連載）。

金メダルのたびに米田監督からLINE、「膝は全く問題ないです」

「率直にすごいなと感じた。体操選手にとって膝前十字靭帯の断裂はかなり厳しい状況。にもかかわらず、オペ後に体操男子の個人総合で金メダルを取った選手は他にいないのではないかな。これから同じけがをした選手にとっても大きな勇気を与えるとともに、私たちの技術力をさらに磨かなければいけない。これは大変な仕事になると気を引き締めた」

パリオリンピック終了から間もない8月16日、「AR-Ex 尾山台整形外科」（東京都世田谷区）で取材に応じた医療法人アレックス理事長の林英俊氏は、心からの喜びを語った。もっとも、競技会場でも、テレビでもライブでは岡選手の競技を観ていない。

林氏が、体操選手の手術を担当したのは植松鉦治選手が最初だ。ロンドンオリンピック予選の約1年前の2011年4月、膝前十字靭帯を断裂。5カ月後の復帰を目標にして手術を行った（詳細は、AR-Ex Medical Groupのホームページを参照）。

「植松君をはじめ、手術後は練習を含めてほとんどの試合を会場まで観に行った。ジャイアンツのチームドクターを務めた8年間も、治療した選手全てを現場までチェックしに行った。けれども、徐々に特にオペ後の選手をライブで観るのが怖くなった。こちらのストレスが大きく吐き気等が止まらなくなるからである。現在は試合の結果が出て、再受傷等が無いことを聞いてからビデオで観ている。岡君の時もそうだった。金メダルの度に米田（功）監督から『膝は全く問題ないです』というLINEがあり、安堵してビデオを観た」



1964年生まれ、1991年日本医科大学卒。同大医局などを経て、2003年医療法人アレックスを設立。現在は東京、埼玉、長野の3都県で8つの診療所を運営、「AR-Ex Medical Group」と称し、その代表を務める。

「岡選手の関節鏡視下手術「3つのポイントがあった」

岡選手は、2019年の世界ジュニア体操競技選手権大会の個人総合で金メダルを取るなど、早くからその活躍が注目されてきた。右膝前十字靭帯と半月板を受傷したのは2022年の全日本選手権、全治8カ月と見込まれた。

「岡君は反張膝なので、再断裂のリスクが高く、難しい手術だった。鉄棒をはじめ各種の体操競技で、左右対称で綺麗に伸びた着地の膝を作れるように、詳細で緻密な手術を心がけた。もちろん、再断裂させないことは絶対条件。手術の方式は、代用腱をどこから何を持ってくるか、どこに関節鏡の穴を開けるか、靭帯をどう固定するか、これら3点がポイントだった」と林氏は振り返る。

膝前十字靭帯はいったん断裂すると再生はしない。同側から代用腱を取る医師は多いが、林氏は対側から取る。負傷した同側から取ると、さらにダメージを受けることになり、再断裂しやすいという長年の経験からだ。関節鏡の穴についても、ミリ以下の単位で調節できる手法を採用。代用腱の固定も、再断裂せず、かつ可動域や柔軟性などを考慮しつつ検討した。

林氏は膝前十字靭帯再建をはじめとする関節鏡視下手術をこれまで5000例以上を経験している。「AR-Ex Medical Group」全体での関節鏡視下手術は年約700例、うち膝前十字靭帯の手術が年約200例だ。これら豊富な症例を基に、スポーツの種類や体操でも競技別、年齢別など様々な要素を加味して、一人一人に最適な治療法を検討できる強みを岡選手の治療でも発揮した。

岡選手の回復力はすばらしく、術後のリハビリは何の問題もなく、素晴らしい回復力を見せたという。「治療は、選手や監督が執刀者を100%信頼してくれると、まずうまくいく。術後の経過も丁寧に、米田監督は報告してくれた。手術をやって復帰するまでに、膝が悪かったら腰が悪くなるなど、運動連鎖でおかしくなることが非常に多いがそれもなかった」（林氏）。

「AR-Ex」に込めた反骨精神「人工関節に対峙」

「AR-Ex Medical Group」の「AR-Ex」は、スポーツ外傷・関節障害を治療する上での3つの柱であるArthroscopy（関節鏡視下手術）、Rehabilitation（リハビリテーション）、Exercise（運動療法）の頭文字から取ったものだ。

「人が持っている関節を温存して何とか治したい。人工関節置換などに至る前の治療法の選択肢をたくさん持たたい。ある意味、人工関節に対峙するという意味もあって名付けた」（林氏）

3つの柱を支えるため、Group全体で約250人という充実したスタッフを抱える。内訳は常勤医約20人、肩関節、肘関節、膝関節、股関節、脊椎、足関節などの各領域の専門家を揃える。理学療法士やトレーナーが約100人、柔道整

復師、看護師、事務職員などだ。Group全体で外来患者数は1日約1500人。スポーツ選手だけではなく、一般の患者も幅広く診る。



AR-Ex 尾山台整形外科は19床の有床診療所ながら、手術室は3室有する。

「AR-Ex 尾山台整形外科」、手術室3室の有床診

「AR-Ex Medical Group」の中核となる「AR-Ex 尾山台整形外科」は、19床の有床診療所。1.5テスラのMRI（2台）をはじめ、X線CT、超音波など、多数の各種診断機器を揃える。手術室は3室、Groupの他の診療所の手術はここで対応する。

常勤医は、週1日程度はGroupの他のクリニックに出向く。林氏自身は、経営者としての仕事のほか、「AR-Ex Medical Group」内では、紹介のアスリートを中心に予約外来、紹介執刀依頼などを担当、後進育成にも力を入れる。2024年1月から日本体育大学のクリニックの医療顧問を務め、週2日の外来（9月からは週3日の予定）を担当、2024年12月を目途に日体大との連携体制も構築中だ（詳細は、AR-Ex Medical Groupのホームページ参照）。

「関節外科に特化、大学に負けない設備と技術力」

「大学病院は、整形外科全般に幅広く取り組まなければいけない。一方、我々は関節外科に特化、予算も集中でき、かついい機器があれば迅速に導入できるのも我々のメリット」と語り、大学病院に負けない設備、そして技術力と林氏は自負する。

「TENEX」（超音波ガイド下で腱炎、腱付着部障害などを来した組織を超音波振動で乳化、吸引して修復を促すための治療機器）を日本で最初で導入するなど、より良い最先端治療があれば自由診療にも取り組む。最近、力を入れる一つが、テニス肘やゴルフ肘などに対する動注治療。異常血管（もやもや血管）が原因であることが多く、動脈に抗生剤を注射する手法だ。

「AR-Ex Cloud Network System」を構築し、電子カルテ、MRIをはじめとする画像データなどはGroupのクリニック内で共有している。治療したアスリートの試合先などに同行した場合も、モバイル端末で情報を閲覧することが可能だ。スポーツ整形外科の領域は日進月歩。学術担当の理学療法士がおり、最新知見の情報収集や、Groupの豊富な症例を基に、学会発表や論文化などにも取り組む。

常に最先端のより良い医療を取り入れるには、医師をはじめとするスタッフのリクルートも欠かせない。「医師採用の一番の条件は、熱意。向学心、そして優しさ」と林氏。学閥はなく、今いる医師の出身大学もバラバラだ。

最近リクルートした一人が、木崎一葉医師（注：崎は、「たつさき」）。以前はカナダのダルハウジー大学整形外科で、肩・膝関節鏡手術に特化したトレーニングを行っており、世界一とされる「肩関節脱臼」の手術手技を学び持っていた。2泊3日の強行軍で股関節鏡視下手術の第一人者、内田宗志医師とともに林氏がカナダ・ハリファクスまでスカウトに行ったところ、木崎氏の自宅には、「マイ関節鏡」や肩関節、膝関節のほぼ等身大の模型があふれていたという。同大で行った自分の手術ビデオを全て保存、字幕も入れて他の研修医たちに勉強のために配布したりもする優しい医師でもあった。「それを見た瞬間に、私を越えていると思った。すぐに白旗を掲げて、『来てくれないか』とオファーした」。

では林氏はなぜスポーツ整形外科に特化した医療を手掛けるようになったのか——。（Vol.2 に続く）



林氏（左）と木崎氏（右）。木崎氏が持つのは、CT画像を基に3Dプリンタで作製した関節模型。手術前に全例で作製し、手術のシミュレーションを行うほか、術後には模型を患者にプレゼントしている。

【林英俊・医療法人アレックス理事長に聞く】（2024年8月16日に取材）

Vol.1 金メダル3つの岡選手、大けがからの復帰支えた執刀医

Vol.2 開業見越し医師1年目から月10万円を友人2人で貯金

Vol.3 「因習的な整形外科、終わりを迎えようとしている」

林英俊・医療法人アレックス理事長（AR-Ex Medical Group代表）に聞く 連載記事一覧

最新回

01 金メダル3つの岡選手、大けがからの復帰支えた執刀医 - 林英俊・医療法人アレックス理事長 ◆Vol.1

表示中のページ | 8時間前



記事検索

ニュース・医療維新を検索

